



「街の木活用ワークショップ」が開催されました！

25日、旧上井草保育園が障害者施設に建て替わるのに伴ってやむなく伐採された桜の木を、地域の人々で活かす「街の木活用ワークショップ」が開催されました。保育園児や地域の方たちに親しまれた桜の木を、何か形に残せないかと開かれたワークショップです。会場となった都立農芸高校の生徒や卒園児など約30名が集まり、伐採された桜の木をみんなで製材し、剥いた樹皮を使った草木染などを体験しました。

平成30年7月、旧上井草保育園（上井草3-8-7）が移転し、新たに障害者施設に建て替わるのに伴って、保育園の園庭を包み込んでいた大きな桜の木の一部をやむなく伐採することになりました。しかし、子どもたちをずっと見守ってきた桜の木を“そのまま処分するのではなく、何か形に残したい”という思いから、今回のワークショップが企画されました。

7月初旬、桜の木の伐採作業が行われました。桜の木は、高さ約10メートルで直径80センチほどの巨大な木を含む2本が活用されます。伐採した後は、傷みがない部位を切り出して、ワークショップで使用できるようにと準備が進められました。



25日、旧上井草保育園の卒園児や、会場となった農芸高校の生徒など約30名が集まり、「街の木活用ワークショップ」が開催されました。

午前中は、大鋸（おが）と呼ばれる大きなのこぎりを使って木材を挽き切る木挽きや、剥いた桜の樹皮を活用して手ぬぐい用の布を染める草木染など、さまざまな作業を行いました。お昼休憩をはさみ、午後は作業も大詰めです。そして、約6時間の作業を経て、参加者たちの工夫を凝らした模様が染まった、唯一無二の草木染の手ぬぐいが完成しました。

参加した子どもは、「木を削るのは難しいけど、すごく楽しい」「きれいに染まった」と喜び、農芸高校の生徒は「授業とは違った貴重な体験ができた」と話していました。

また、来秋には、障害者施設のオープンに合わせて、今回機械を使うことなく参加者たちの手作業で木挽きされた樹を使った2回目のワークショップを実施する予定です。



長い間、保育園で子どもたちに寄り添ってきた桜の木は、これからも多くの人たちを楽しませてくれることでしょう。

【報道機関 問い合わせ先】

障害者生活支援課：03-3312-2111（代表）